



勇武編

霜夜鐘十字  
迂楚第二號

編集文來  
匪工芳辛

梓元錦壽堂

70

65

60

55







雨相夜鐘十字辻筈

錦壽堂發兌

二編上

此多感一感名物自心  
 不考進らる心  
 通多ぬ人了解  
 玉々々々々々



大蕪芳年畫  
山閑人交來錄



二編下



一編中



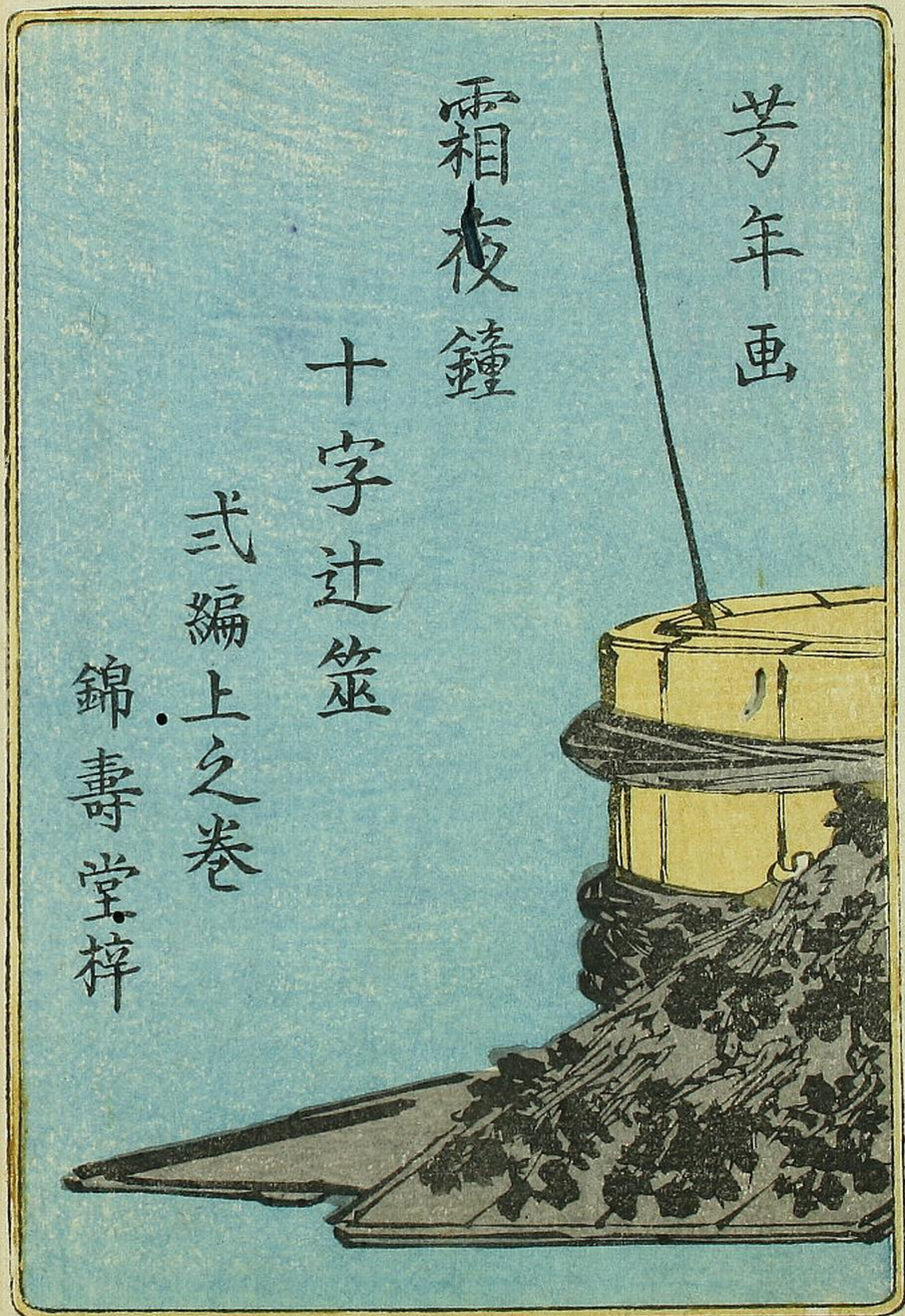
芳年画

霜夜鐘

十字辻筮

式編上之卷

錦壽堂梓



<48-2255>

河竹大入が新作の霜夜鐘の歌舞伎の客歳の末尾  
 よう引つぎ御覽み入しと。その後に三冊物取仕組  
 前ふ初編と出せしに案外な御高評直に跡をと  
 好望お写し取る次編の草稿画割ハ總て芳年が筆に  
 咲せる花の雲鐘ハ上野欽浅草比奥山の場が最初りて廻り  
 舞臺の車坂孝少女を感じる杉田が情けおむらが不時の厄  
 難まぎヤット纏二編の発見新富座乃繁栄めつて  
 當方も相うらび御評判は程と伏し希ふ

明治十三年六月下旬

交束記

芳年画



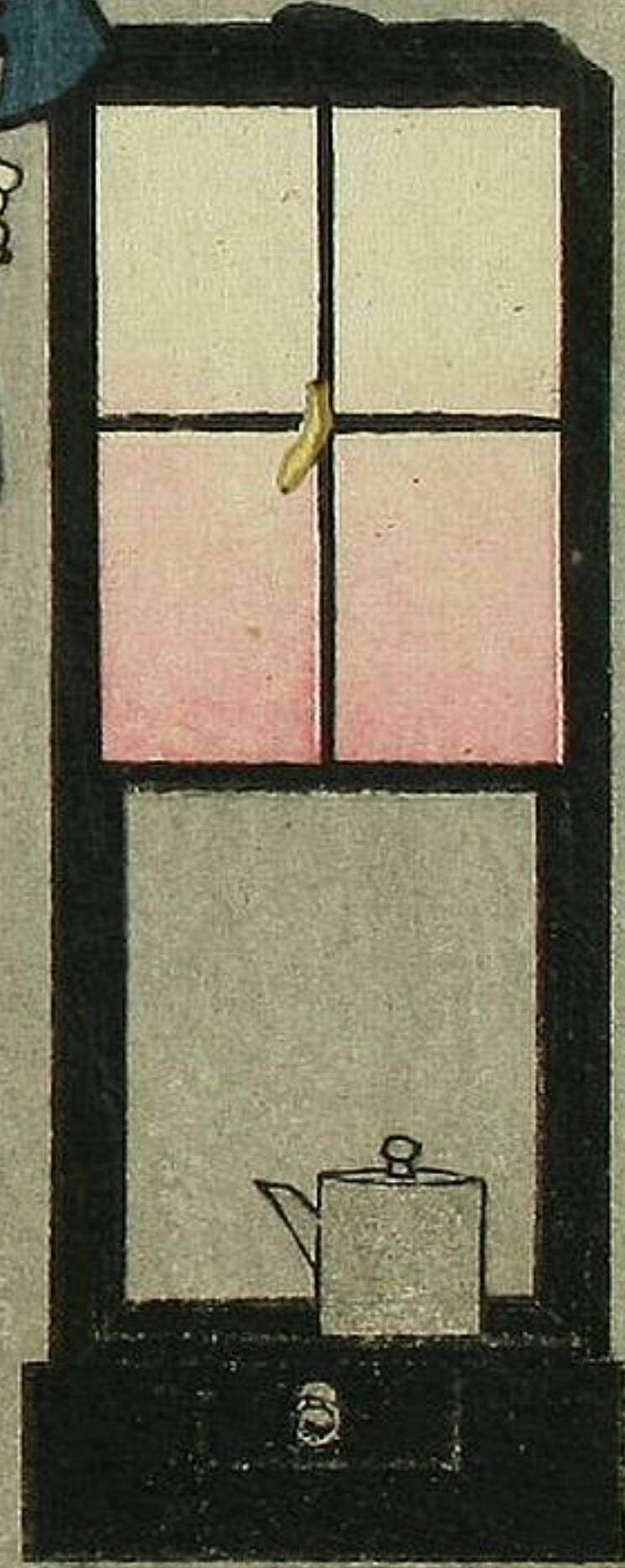
義太夫語於豊ぎだうぶごふかよ



六浦正三郎むつらまささぶろ



杉田薰すぎたのうぶ







金瓶樓の娼妓小紫  
後石齋妻於村

二幕目

浅草寺真

山



○櫻をわけ

○櫻をわけ 古名を泥流の礼安の  
持たる中 最初の花見期六と人  
まよふ合ふ 泥流の二人小対ひ  
時おあふ 礼安の何五

今年三所を廻ると柳の  
加せで末のどく 乃く五羽  
おやまね下 葛絲の中  
種々盗物と取合せ泥流の  
連はと極め低帯と海に代物  
と風流なへ色むるを 糸は更  
ゆまくあがおあふまの人の  
ねんえとをて女く兄制

○花のさく

○花のさく 花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは

花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは

花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは

花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは



○花のさく

○花のさく 花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは

花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは

花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは  
花のさくは 花のさくは



いさな高法いあやあねい泥「とろろが娘が雲を捲て巴が

いとを利ねくろあつと投い合ふあうねいけるも

上舟うらろつと出の豪家の息子ふじこ

夜更世に控ひふまきと放あつひ小

勅めて振を振さむ首尾よく

築を取らせとろろ七十回指て

指の跡月の合とまて上り

あつと指の内と技揚で



お前の娘の客

豪家の息

子の紙

入をを

晩接

ハ己達

が遊換

あつと引

つるまの

敵き

あつと

とえさる  
無さ  
あつと  
様今うへ



紙入を捲れて仕舞中

あつと五百圓の証書の為

小舟を投て息子があつと

いさな高法いあやあねい泥「とろろが娘が雲を捲て巴が

いとを利ねくろあつと投い合ふあうねいけるも

上舟うらろつと出の豪家の息子ふじこ

夜更世に控ひふまきと放あつひ小

勅めて振を振さむ首尾よく

築を取らせとろろ七十回指て

指の跡月の合とまて上り

あつと指の内と技揚で

とろろ  
あつと  
丹地  
給儀の  
糖り  
生協  
と胡  
え首  
尾よ  
く灰へ

霜降鐘三上

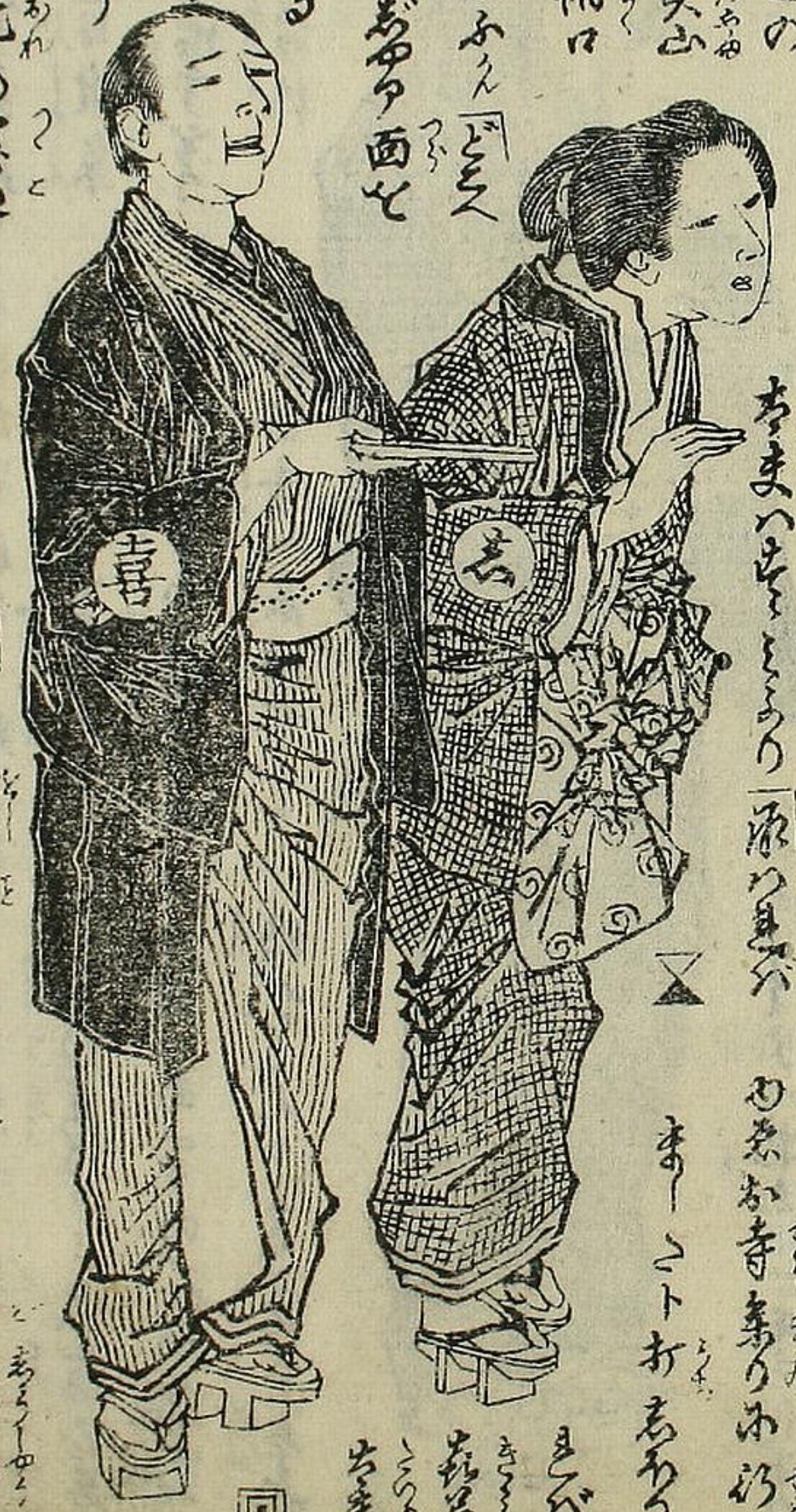


つぎ 此音へ捲あけて三ツ小割て  
 根津へをもあし上りかと思ひの外  
 二枚坊で丹枕が病大い喰ひ  
 付止大徳紙でしと迎ふ無きけ  
 その發動で紙入も流しと住舞  
 け方も三人も麻とんえとやア  
 つまみね人素心とて  
 誰れもあか  
 惟う重晩とあつと拾ひと  
 老る者さう  
 て子の悪  
 いもあしと  
 後と死小  
 後かきと山と



○モシとあへお出さるのい  
 小紫さんやアとて平せんり  
 オヤ清とあつと在るたまさん  
 久しくお用あからあの子  
 四七沙汰を被しほと三人  
 うちの屋敷店め麻札へ授と  
 掛まら始のお海い  
 立出くも  
 おもさんかお出葉  
 ちすつととすまそ  
 まことふお用出  
 ちうとさうます  
 トりまておむと  
 い海とそ  
 お用出といと  
 おもあく二七夜  
 風  
 警  
 根津の山新造さる能う入らつ  
 亡らつて今日が四十九日  
 世が甲斐由る

明乳袋と葛籠へ  
 打込中見世の  
 尾張屋の無天心  
 の熱菜で一掃口  
 文つて版と喰ふん  
 仍くも中見世あつと面と  
 知つて居るさる  
 うの大令之坊  
 て軍勢ホーや  
 能 志由あつと己も突込  
 てト二人ハ打連多て志き坊  
 折ううへ右折の妻のおむうい下女を連甚  
 末かる終りる若木の男義経若木の若葉あまが



あまのま たト返出は花多若葉  
 志まへまともり 源のま  
 亡らつて今日が四十九日  
 世が甲斐由る  
 志由あつと己も突込  
 てト二人ハ打連多て志き坊  
 折ううへ右折の妻のおむうい下女を連甚  
 末かる終りる若木の男義経若木の若葉あまが  
 毎日後つてあし  
 小児おの由  
 毎日後つてあし  
 小児おの由











つぎ 縁付までさうまする刃、ま石をよと云仁ハ  
細己でいさなれども浪浪家あて有名も兼て名前の

おあけやていさ  
ます 八八組  
おあけやていさ

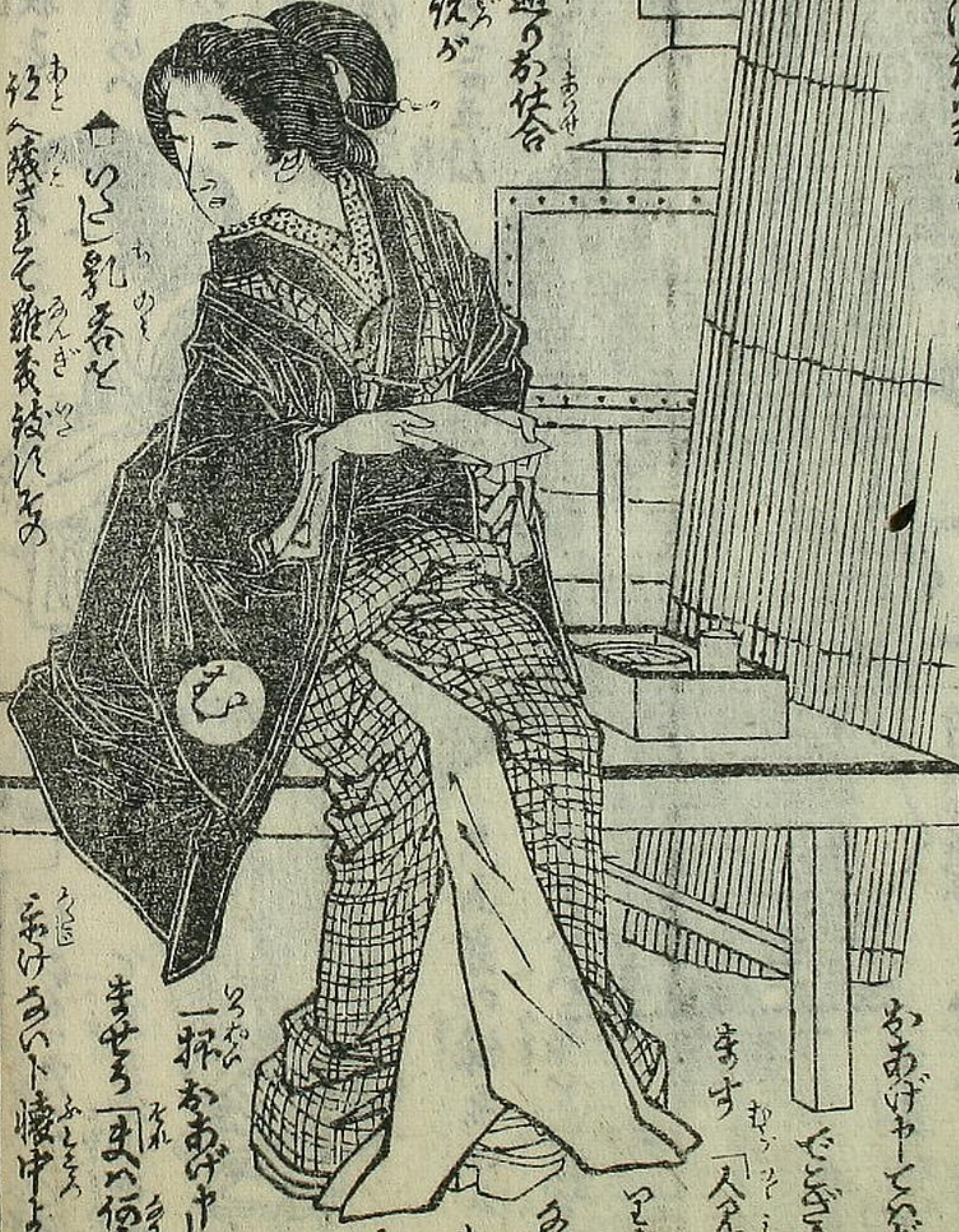
△ 水知枝也

何小枝せば合な  
ふしや 作あき通るおは合

ふく 佐子娘男が  
能くそを性かよく  
何う何と様いあ

何小枝せば合な  
ふしや 作あき通るおは合

何小枝せば合な  
ふしや 作あき通るおは合



一杯をあびせし  
ませろ 夫は何も  
系けあつ懐中より

妻政新造の小着 一不不事つま

せんが納い没めお 次血親小ま

株小樂文水新造

さるまとののの

娼妓小務の志

放天のあそとや

眼でござり来り心痛まき

放るるいし終り眼守あ

哲問もめて来るのみふ

困苦救し居るも

如何なる糸と



小児を函にあり汚衣い  
け安も 一とく 水を煮  
少の居ひまぬトか村ハ  
抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る

抱る







銅と区 左より右に改めてその重さお役以  
 中世の青銅の料ともありてその重さ納成れて下より  
 ませ 尤も銅の多き位切を懐くも中世ありては  
 如所中の重納成をあらう 更なる重下より  
 中世 今も何せも色も懐きん丸解明東洋一の  
 金子を果以果世故成るるく家録を運送  
 有るは 極つる貴金中下下後高深開き  
 とも 銅の重さ納成の多きくまじき成り  
 母就が長病短以死成故 亦も中世又も秋之病  
 交放二ヶ年坐食は生活の危を以て折柄  
 妻が不之敷の短病難費多き中 盜難成難  
 衣袋を以て負候の事小家を併以て金も方角の  
 上のつぎ 花置通ひも朋友の交際の事か  
 僅くは五文差を為すも成出の必前を忘  
 れぬ小幣が重んで思ひ金中下下後高深開き  
 更のせは重なる志成る心の中下下後高深開き  
 必前の様 着る六  
 つかくと茶 七実あり  
 金の 金  
 色へも掛るを暇痛まらざる様の  
 今の三人の相帯を以てする  
 不持する金中下下後高深開き  
 鏡りては金中下下後高深開き  
 一の三人の相帯を以てする  
 不持する金中下下後高深開き  
 鏡りては金中下下後高深開き



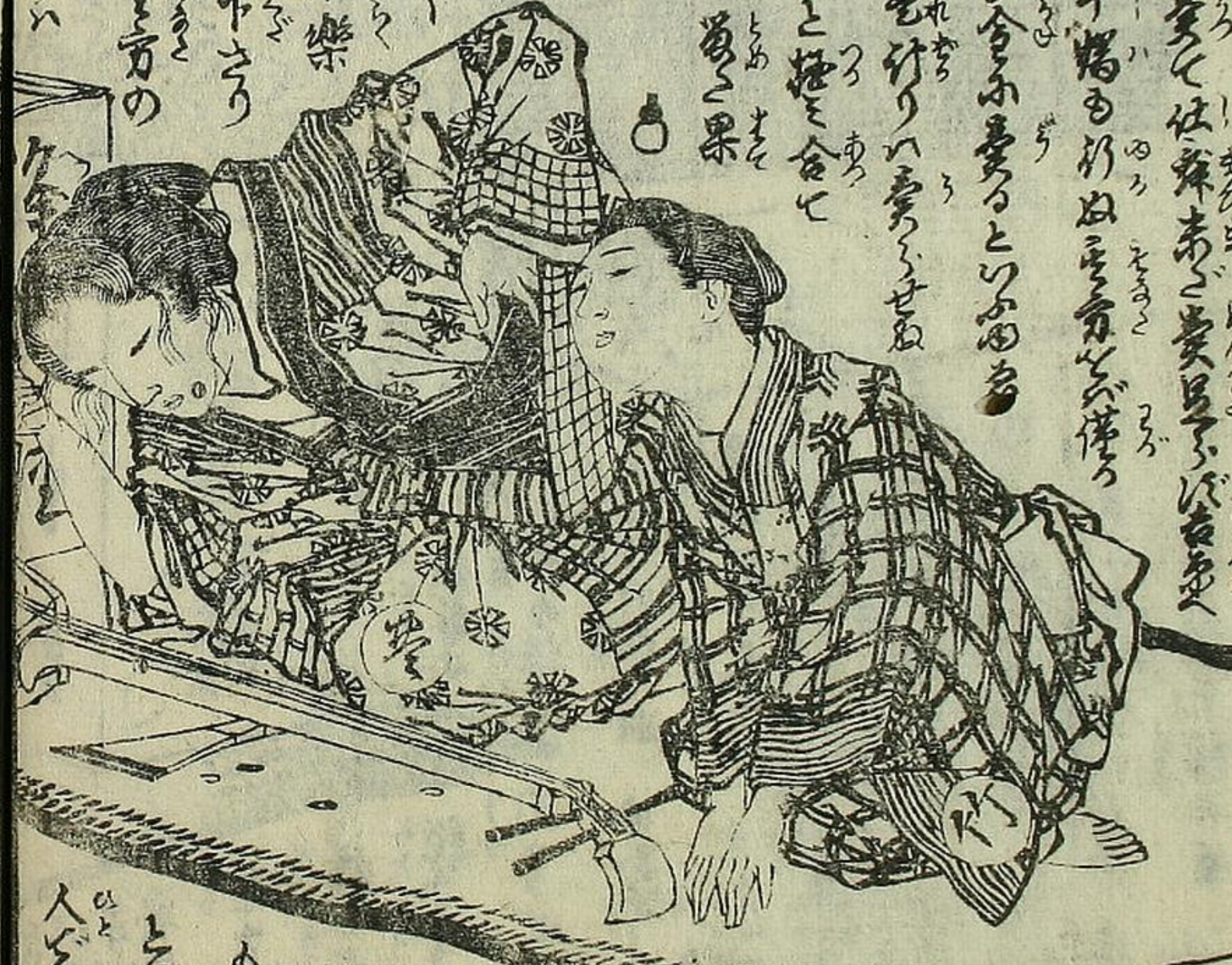
上のつぎ 花置通ひも朋友の交際の事か  
 僅くは五文差を為すも成出の必前を忘  
 れぬ小幣が重んで思ひ金中下下後高深開き  
 更のせは重なる志成る心の中下下後高深開き  
 必前の様 着る六  
 つかくと茶 七実あり  
 金の 金  
 色へも掛るを暇痛まらざる様の  
 今の三人の相帯を以てする  
 不持する金中下下後高深開き  
 鏡りては金中下下後高深開き  
 一の三人の相帯を以てする  
 不持する金中下下後高深開き  
 鏡りては金中下下後高深開き







〇あつた二枚  
 法廷にあり  
 二浦堂  
 と標を  
 行の  
 果  
 〇あつた二枚  
 法廷にあり  
 二浦堂  
 と標を  
 行の  
 果



子のお茶屋さんへ  
 義太夫館と娘  
 買て呉るのに  
 招て女房  
 美ふと  
 〇あつた二枚  
 法廷にあり  
 二浦堂  
 と標を  
 行の  
 果

〇あつた二枚  
 法廷にあり  
 二浦堂  
 と標を  
 行の  
 果



子のお茶屋さんへ  
 義太夫館と娘  
 買て呉るのに  
 招て女房  
 美ふと  
 〇あつた二枚  
 法廷にあり  
 二浦堂  
 と標を  
 行の  
 果









































人形紙一  
系中にておて  
多しと入るに  
おせんとの為体小

△ 袋を  
履換る  
空同相  
交折紙  
うら出合  
路お指灯  
の灯りぞ  
あはれ  
びつろ  
ぞと  
おん  
の



○ け方の登るは遠出は七途へ  
せと合助がわむらが帯の端へ  
おんさうかま  
おんさうかま  
何れを  
何れを  
何れを

△ その  
ある金籠箱の小紫衣  
る横妻風ふふと登り之類  
り速く苦捲のち所通り  
附て乃之面をさし一採添て次







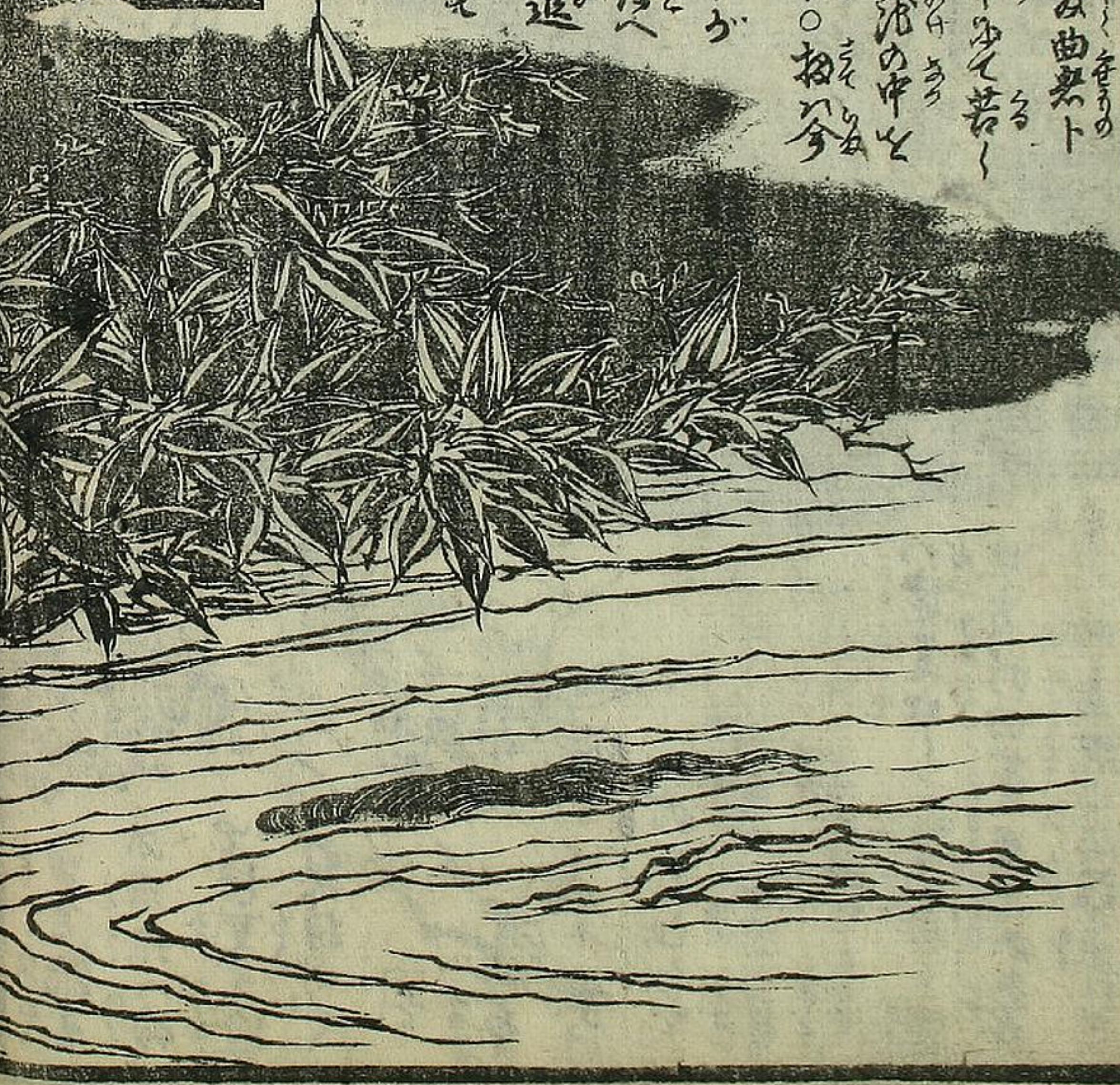








つぎ 雲を霞と遊ばし 正安曲末ト  
 経返屋んとあす折しも沈の中ゆて若く  
 水着者ヤ水着者下多處り沈の中と  
 窓ひて 洞中へあふ女の空手〇おひ今  
 の曲若か下又由返えと遊行くか  
 主止り女が溺死由針られ下下へ  
 主戻り来ごきくハ仍ほと又由返  
 りんと白くは花をむふらふらとて  
 イヤ人命めい好がじト南院と  
 官持七傍へ重沈の  
 汀へ死入  
 て薫い  
 おむふと



小振小かへ  
 漸く小抱き  
 未だ懐書  
 之解き終  
 せんく  
 杖せしやうは下  
 深くは竹葉の懐書  
 出たては小波真け事の  
 竹葉と小抱き

一蒲葺以て  
 せんト環の葉  
 せお村の足入を  
 湯方木村の次へ













七  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

上  
下  
左  
右  
中  
前  
後  
東  
西  
南  
北

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

010190517344



今居十年 丁丑年

本居

市川原左衛門持重



於此四母